国語

◆次は、経済学者である中村達也氏の「方法としての歳時記」という表題の文章である。よく読んで、後の問いに答えなさい。

そういえば、われわれ産業社会の住人は季節を時間に、土を土地に、といった読み替えをずいぶんとしてきたような気がする。自然をただちに資源と見、人間を見ても労働力や消費者としてしか見ない、といったふうにである。経済学のモデルがそうではないかといわれるかもしれない。確かに、そうである。しかし、そもそもモデルとは現実そのものではないのである、何がしかの抽象化によって切り落としたことがらがあるはずであり、その意味では、現実から遊離しているのは当然ともいえる。そうしたことをわきまえたうえで、現実とは異なるモデルによって、現実の何が見えてくるかを問わなければならないはずである。

むしろ問題は、労働者や消費者でしかないような人間、資源でしかないような自然、土地でしかないような土、単調な時間の流れでしかない季節、といった具合に、現実の方がモデルに近づくことによって、モデルが迫真性をもつようになってしまうことではなかろうか。

（「豊かさの孤独」による。）

ものごとから、要素や性質を抜き出してとらえること。

表現されたものが現実とそっくりに見えること。

問　この文章で、「産業社会の住人」はどんなことを見直すべきだと述べられているか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　現実のある一面にしかすぎないものを、まるで現実そのものであるかのように感じていること。

イ　現実の世界にある無駄なものを切り捨てて、現実を合理的なものにするべきだと考えていること。

ウ　現実を抽象化することで生まれた様々なモデルは、現実から遊離していて当然だと考えていること。

エ　現実の世界から逃げ出して、自然の中で過ごすことで人間性を取り戻そうとする人が増えていること。

オ　現実の世界にある季節を感じさせるようなものが、産業社会の発展によって急速に失われていること。

「モデルが」

↓　現実から抜き出した要素・側面が

「迫真性をもつ」

↓　現実そのもののように見える

◆次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある人、木のつひえをいとひ、乗り物の棒さへ細めしとき、むかしはささら竹に硫黄をつけ、これをつけ竹と言ひしに、今の世、つけ木をもちゐるはいかんと、こざかしき人の言へるにより、さらばとて、つけ竹に改めけれど、火よくつかずして、ほどなくやみてけり。

①小事に心をもちゐるもをかし。また②話のみ聞きて、いまだこころみざる事を、みだりに言ふもうらめし。

（注）つひえ＝費用がかかること。
いとひ＝「いやがり」の意味。
乗り物の棒＝駕籠の長柄。
ささら竹＝先をこまかく割った竹。
つけ竹＝檜・松・杉などの薄い木片の先に硫黄を塗りつけた「つけ木」が、火を移すのに一般的に使われていた。「つけ竹」は、つけ木の代わりに竹を使ったもの。
こざかしき＝「利口ぶった」の意味。
をかし＝ここでは、「滑稽だ、おかしい」の意味。

問　この文章で述べられている内容として適当なものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア　ささいなことでも軽視してはいけない。

イ　過ちに気づいたときにはすぐ改めるべきだ。

ウ　一度始めたことは続けることが大切だ。

エ　本来の目的を見失うのは愚かなことだ。

オ　まずは試してみようという姿勢が必要だ。

カ　自分の発言には責任を持つべきである。

①ささいなことに気を配るのは**滑稽だ**。

↓ 費用がかかること

つけ木をつけ竹にしたことで火が付きにくくなった

↓ 目的を果たせなくなった。

②話だけを聞いて、まだ試してもいないことを、むやみやたらに話すのも**残念だ**。